佛教大学大学院紀要　文学研究科篇　第 47 号（2019 年 3 月）

論　文

『楞伽経』と三性説の構造的変化について

―― 縁起説と依他起性を手がかりとして ――

石　橋　丈　史

〔抄　録〕

最古の三性説を説く『菩薩地』においては、勝義に実在する vastu を中心とした、唯識思想とは結びつかない実在論的な思想を説いている。しかし、『大乗荘厳経論』や『中辺分別論』といった論書に至ると、実在論的な思想は影を潜め、唯識無境と結びつき、空性が実在するという説へと展開する。こうした実在論的な思想から唯識三性説へと展開する三性説の思想史に、『楞伽経』がどのように位置づけられるかを考察しようとするのが本稿の目的である。その考察の手がかりにするのが『楞伽経』の縁起説と依他起性の概念である。考察の結果、『楞伽経』の縁起説は龍樹文献群に説かれるものと同一であり、その三性説は龍樹の縁起思想に基づいたものから唯識と結びついたものへと展開していることが分かった。これは、龍樹系の三性説を伝える『楞伽経』が瑜伽行派に影響を及ぼし、実在論的三性説から唯識三性説への展開を促したことを示唆しているだろう。

キーワード：楞伽経、三性説、縁起、龍樹

1. はじめに　―― 考察の手順 ――

本稿では、次の 2 点に絞って考察を進める。①『楞伽経』（LAS）の縁起説と三性説の内容をまとめる。② LAS の縁起・三性説を、瑜伽行派そして龍樹文献群[1]所説のものと比較する。

①では、その縁起説が「偈頌品」（SAG）から経典本文にかけて[2]、空・無自性を意味するものから相依性の意味へと展開していることを明らかにする。そして、その三性説は、SAG では唯識説を前提にしていない説（龍樹文献『四讃頌』（CS）との共通偈）を含むのに対し、本文では唯識無境、虚妄分別と結びついた『大乗荘厳経論』（MSA）や『中辺分別論』（MAV）に類似した説へと発展していることが分かった。これは龍樹系の縁起、三性説から唯識三性説への展開があったことを示唆しているだろう。

②では、LAS の縁起説が、アビダルマ的な十二支縁起を意味する瑜伽行派よりも、龍樹文献群所説のものと同一であり、LAS の作者が龍樹思想の圏内にいた人物であったことを明らかにする。ただ、瑜伽行派の文献でも、唯識三性説を説く MSA や MAV では龍樹系の縁起説を含んでおり、実在論的三性説から唯識三性説への展開と、伝統的な十二支縁起から龍樹系の縁起説への変化に対応関係があることが分かった。

以上の考察の結果、当初、実在論的な三性説を説いていた瑜伽行派が、龍樹系の縁起、三性説を取り入れることによって、唯識三性説を形成していったのではないかとの仮説が得られた。この意味で、龍樹系の縁起、三性説を伝える LAS は三性説の構造的変化[(3)]における重要な思想的位置を与えられるべきではないかという結論を得た。

2. LAS に説かれる縁起

2-1. SAG に説かれる縁起

「縁起」（pratītyasamutpāda）という語は一例見られるのみであるが（184 偈）、同様な用例として、縁によって生じたもの（pratyayasambhava/477 偈）、あるいは、諸縁の和合（sāmagrya/47 偈，kalāpa/597 偈）によって生じたものという表現が見られる。内容としては、いずれも、それら縁生のものは空、無自性であり、諸法の不生不滅、不一不異、非有非無を説く内容が大半を占めている。これは、後述するように（本稿 4-1, 2）、『中論』（MK）をはじめとした龍樹の縁起説に類似している。相依性（anyonya-apekṣa）の縁起を意味するものは少ない。

nābhūtvā jāyate kiṃcit pratyayair na vinaśyate /
vandhyāsutākāśapuṣpaṃ yadā paśyati saṃskṛtam /
tadā grāhaś ca grāhyaṃ ca bhrāntiṃ dṛṣṭvā nivartate // SAG_24（II-143/144ab）//
元からなかったものは、如何なるものも、諸縁によって生じず、滅しない。有為を石女の子であり虚空の華であると見るとき、迷乱を理解して、能取と所取は消滅する。

hetupratyayasāmagryā bālāḥ kalpanti saṃbhavam /
ajānānā nayam idaṃ bhramanti tribhavālaye // SAG_47 //
凡夫は、因と縁の和合をもって（諸々の存在の）生起を分別する。この理趣を知らないまま、三有の住処をさまよう。

bhāvā yeṣāṃ hy anutpannāḥ śūnyā vai asvabhāvakāḥ /
teṣām utpadyate bhrāntiḥ pratyayaiś ca nirudhyate // SAG_69 //

諸々の存在の本質は不生で空であり、無自性であるが、そのような存在に対する迷乱は、諸縁によって生じ、また滅する。

na hy atrotpadyate kiṃcit pratyayair na nirudhyate /
utpadyante nirudhyante pratyayā eva kalpitāḥ // SAG_85 //
ここで、如何なるものも、諸縁によって生じず、滅しない。分別された諸縁こそが、生じ滅するのである。

na cotpadyā na cotpannāḥ pratyayo 'pi na kecana /
saṃvidyante kvacit tena vyavahāraṃ tu kathyate // SAG_89（II-144）//
いかなる縁も生ずべきものではなく、すでに生じてしまったものでもなく、どこにも存在しない。しかし、それによって世俗の言説が語られる。

kena prasādhitāstitvaṃ pratyayair yasya nāstitā /
utpādavādadurdṛṣṭyā nāsty astīti vikalpayet // SAG_195（III-13）//
如何なる因縁によって、有性が成立し、その無が成立するのか。生起を論ずる邪見によって、無である、有であると分別されるだろう。

yasya notpadyate kiṃcin na kiṃ cittaṃ nirudhyate /
tasyāsti nāsti nopaiti viviktaṃ paśyato jagat // SAG_196（III-14）//
何ものも生じず、何ものも滅しない。その時、寂静なる世間を見る人にとっては、有と無は得られない。

anutpannāḥ sarvabhāvā yasmāt pratyayasambhavāh /
kāryaṃ hi pratyayāḥ sarve na kāryāj jāyate bhavaḥ // SAG_477（III-23）//
一切の存在は不生である。それゆえに縁から生じたものである。すべての諸縁は果であるが、果より有は生じない。

2-2. SAG における依他起性の意味

SAG における縁起が空・無自性の意味であるとすれば、三性説としての依他起性もその意味を前提にしていると考えられる[(4)]。三性説の起源として知られる『菩薩地』（BBh）「真実義品」では、様々な言説・仮説の所依として vastu の実在、唯事（vastumātra）が説かれ、その vastu は空による否定を重ねても、否定されずに残るという瑜伽行派独自の空性理解がなされている（本稿 3-2 参照）。

それに対して、SAG では、前節の通り、仮説の所依である諸法は空・無自性、不生不滅であり、それらに対する迷乱、分別されたものも無であると解釈できる。既に指摘した通り[(5)]、SAG 中の三性説は唯識思想を前提としない内容を含み、それが CS との共通の偈になっている。その意味で、仮説の所依の有を主張する瑜伽行派に対して、龍樹の縁起説の延長としての依他起性理解がなされていた可能性がある[(6)]。

nāsti vai kalpito bhāvaḥ paratantaraṃ ca vidyate /
samāropāpavādaṃ ca vikalpe no vinaśyati // SAG_305 //
分別されたものは存在しないが、依他起は存在する。分別における増益と損減は無である。

kalpitaṃ yady abhāvaḥ syāt paratantrasvabhāvataḥ /
vinā bhāvena vai bhāvaṃ bhāvaś cābhāvasaṃbhavaḥ // SAG_306 //
分別されたものが無であり、依他起性が有であるならば、実に、存在無くして存在があり、存在は無から生じることになる。

parikalpitaṃ samāśritya paratantraṃ pralabhyate /
nimittanāmasaṃbandhāj jāyate parikapitam // SAG_307 //
遍計所執されたものによって依他起が得られる。遍計所執されたものは因相と名との結合より生じる。

atyantaṃ cāpy aniṣpannaṃ kalpitaṃ na parodbhavam /
tadā prajñāyate suddhaḥ svabhāvaḥ pāramārthikaḥ // SAG_308 //
分別されたものは円成実ではなく、依他起でもない。その時、清浄なる勝義の自性が存在すると知られる。

これら CS との共通の偈は唯識思想とは無関係であるように見え、その点では SNS など初期瑜伽行派文献所説の三性説に類似している[(7)]。しかし、「分別されたものが無で、依他起が有であるならば、存在無くして存在があり、存在は無から生じることになる」と 306 偈でいうように、（勝義においては）両者の無を説いているように解釈できる。この点で仮説の有を主張する瑜伽行派とは異なる思想を含んでいるだろう。

2-3. 本文中に見られる縁起

本文中では、SAG で説かれた不生不滅の縁起が、より発展的に説かれつつ、相依性としての側面も強調されるようになる。以下に示す用例では、「兎の角」と「牛の角」という、時間

的な前後関係ではない、論理的な関係性が「相互依存（anyonya-apekṣa）」という語とともに示される。

> ye punar mahāmate nāstyastivinivṛttaṃ nāsti śaśaśṛṅgaṃ kalpayanti, tair anyonyāpekṣahetutvān nāsti śaśaviṣāṇam iti na kalpayitavyam | āparamāṇupravicayād vastv anupalabdhabhāvān mahāmate āryajñānagocaravinivṛttam asti gośṛṅgam iti na kalpayitavyam（LAS. 52. 3-7）
> さらにまた、マハーマティよ、無と有とを離れた兎の角が無であると分別する人々は、（無と有は）相互に依存する因であるから、兎の角を無であると分別すべきではない。極微に至るまで観察しても、事物は不可得な存在であるから、マハーマティよ、聖なる智の境界を離れた、牛の角が有であると分別すべきではない。

> atha khalu mahāmatir bodhisattvo mahāsattvo bhagavantam etad avocat nanu bhagavan vikalpasyāpravṛttilakṣaṇaṃ dṛṣṭvā anumimīmahe vikalpāpravṛttyapekṣaṃ tasya nāstitvam | bhagavān āha na hi mahāmate vikalpāpravṛttyapekṣaṃ tasya nāstitvam | tat kasya hetoḥ? vikalpasya tatpravṛttihetutvāt | tadviṣāṇāśrayapravṛtto hi mahāmate vikalpaḥ | yasmād viṣāṇāśrayapravṛtto mahāmate vikalpaḥ, tasmād āśrayahetutvād anyānanyavivarjitatvān na hi tadapekṣaṃ nāstitvaṃ śaśaviśāṇasya | yadi punar mahāmate vikalpo 'nyaḥ syāc chaśavi ṣāṇād aviṣāṇahetukaḥ syāt | athānanyaḥ syāt, taddhetukatvād āparamāṇupravicayānupalabdher viṣāṇād ananyatvāt tadabhāvaḥ syāt | tadubhayabhāvābhāvāt kasya kim apekṣya nāstitvaṃ bhavati（LAS. 52. 9-53. 3）
> その時、マハーマティ菩薩摩訶薩は、世尊に次のように言った。世尊よ、分別が生起しない相を見て、分別の不生起に依存した、かの（兎の角の）無を我々は推測します。世尊は言った。分別の不生起に依存した、その（兎の角の）無を私は（推測し）ない。それは何故か。分別がその（兎の角の）生起の因であるからであり、分別はその角を所依として生起する。マハーマティよ、分別は、（兎の）角を所依として生起するが故に、所依としての因であるから、異と不異とを離れているから、それ（分別の不生起）に依存した兎の角の無を（私は推測し）ない。さらにまた、マハーマティよ、もしも分別が兎の角と別異であるならば、（分別は）兎角を因としないものになるだろう。不異であるならば、それ（兎角）を因とするから、極微に至るまで観察しても不可得であり、兎角と不異であるからそれ（分別）は無となるだろう。その二者の存在は無であるから、何に依って、何の無があるのだろうか。

この一節の後に、4 つの偈頌（435-439 偈）が挿入されているが、本節の内容と関係がある

のは、以下の 438 偈のみである。内容としては、龍樹文献群における「相互依存の縁起説」[8] と同様であることは明らかだろう。

dīrghahrasvādi saṃbaddham anyonyataḥ pravartate /
astitvasādhakā nāsti asti nāstitvasādhakam // SAG_438（II-127）//
長短などは相互に結びついて生起する。有を成立させるのは無であり、無を成立させるのは有である。

2-4. 本文中に見られる依他起性

本文中の三性説は、SAG よりも明確に唯識説と結びついている。すなわち、以下に示す通り、依他起性において分別心の姿が顕現し、遍計所執性が虚妄分別の相であると定義されている。これは MAV や MSA の三性説に近い[9]。

punar aparaṃ mahāmate parikalpitasvabhāvavṛttilakṣaṇaṃ paratantrasvabhāvābhiniveśataḥ pravartate | tad yathā tṛṇakāṣṭhagulmalatāśrayān māyāvidyāpuruṣasaṃyogāt sarvasattvarūpadhāriṇaṃ mayāpuruṣavigraham abhiniṣpannaikasattvaśarīraṃ vividhakalpavikalpitaṃ khyāyate tathā khyāyann api mahāmate tadātmako na bhavati evam eva mahāmate paratantrasvabhāve parikalpitasvabhāve vividhavikalpacittavicitralakṣaṇaṃ khyāyate | vastuparikalpalakṣaṇābhiniveśavāsanāt parikalpayan mahāmate parikalpitasvabhāvalakṣaṇam bhavati（LAS. 56. 14-57. 7）
さらにまた、マハーマティよ、遍計所執性が起こる姿は、依他起性に対する執着から生じる。例えば、草や材木、林、つる草という所依から、幻と幻術師との結合から、一切の有情という色・形を持ち、幻術としての人間の身体が引き起こされ、様々な分別に分別されて顕現するように、マハーマティよ、顕現してあるものもその自性をもって生じるのではない。このように、マハーマティよ、依他起性において遍計所執性である多種多様な分別心の姿が顕現する[10]。事物の分別の姿に執着する習気により、分別しつつ遍計所執性の姿として生じる。

tad yathā mahāmate paratantrasvabhāvāśrayād vicitraparikalpitasvabhāvābhiniveśaḥ pravartate| sa ca tatra na san nāsan na sadasann abhūtaparikalpalakṣaṇatvād atha ca bālair vikalpyate vicitrasvabhāvalakṣaṇābhiniveśena mṛgatṛṣṇikeva mṛgaiḥ（LAS. 118. 1-6）
マハーマティよ、依他起性を所依として種々の遍計所執性の執着が生起するがごとくである。かれは、そこにおいて、有ではなく、無ではなく、有無でもない。虚妄分別の相であるからである。そして、鹿によって陽炎が分別されるように、愚人によって種々の自性の

相に対する執着をもって分別される。

2-5. 小結

以上、LAS の縁起・三性説を見てきたが、その縁起説は SAG から経典本文にかけて、空・無自性の縁起から相依性の縁起へと展開している。後述するように、これは龍樹文献群の縁起と同一であり、LAS の作者が龍樹思想の圏内にいた人物であったことを意味している。三性説については、SAG では唯識説を前提としない CS との共通偈を含んでいるのに対し、本文中では MSA や MAV と同様な唯識三性説を説いていた。このことから、龍樹思想の圏内で、龍樹の縁起に基づいて説かれていた三性説が、唯識思想と結びついた説へと展開していったと考えられる。

3. 瑜伽行派文献における縁起説と依他起性

3-1. 瑜伽行派文献における縁起説

本節と次節において、瑜伽行派と龍樹文献群各々に説かれる縁起説を見て、LAS との比較検討をしたい。既に勝呂［1982］、原田［2004］などで指摘されている通り、瑜伽行派文献に説かれる縁起説は、いわゆるアビダルマ的な十二支縁起として解釈されており、その点は龍樹文献群における空・無自性を意味するものとは異質である。また、相依性を意味する縁起も説かれていない。同派文献中、最古層に属する YBh「本地分」「有尋有伺等三地」において、縁起は十二支縁起に基いて、ātmabhāva（個人存在）が過去から現在へ、現在から未来へ生じることと定義される。その際、異熟識が説かれ、後のアーラヤ識縁起を予想させる内容になっている。

samāsatas tribhir ākāraiḥ pratītyasamutpādasya vyavasthānaṃ bhavati | yathā pūrvāntān madhyānte sambhavati | yathā ca madhyāntād aparānte sambhavati | yathā ca madhyānte sambhūto vartate vyavadānāya ca paraiti | katham pūrvantān madhyānte sambhavati sambhūtaś ca madhyante vartate | yathāpi haikatyena pūrvamaviduṣāvidyāgatenāvidyāpratyayaṃ puṇyā -puṇyāniñjyaṃ kāyavāṅmanaḥ karma kṛtaṃbhavaty upacitam | tatkarmopagaṃ cāsya vijñānam āmaraṇasamayād anuvṛttaṃ bhavati pratisandhivijñānahetubhūtam | adhyātmabahirdhā tṛṣṇā cāsya vijñānasya phalābhinirvṛttikāle sahāyabhāvena pratyupasthitā bhavati | sa kālaṃ kṛtvā pūrvāntād vartamane ’dhvanyātmabhāvam abhinirvartayaty anupūrveṇa mātuḥ kukṣau hetuvijñānapratyayaṃ pratisandhiphalavijñānaṃ yāvad eva kalalatvādibhir avasthā viśeṣair uttarais tasya | garbhagatasya nāmarūpasya yāvaj jīrṇātvāya | saha

pratisandhibandhāc ca tasya vijñānasya yat tadutpattisaṃvartanīyaṃ karma taddattaphalaṃ bhavati vipākataḥ | tadvipākavijñānaṃ tad eva nāmarūpaṃ pratiṣṭhāya vartate |（YBh. 198. 17–199. 7）

（縁起の全体とは何か、といえば）要約すると、三つの様相によって、縁起の区別がある。過去世から現世において生起すること、また現世から来世に生起すること、また現世において生じ、清浄へ赴くことである。如何にして、前世から現世において生じ、現世において生起するのか。前世を知らざる無知なる一類のものによって、善・不善、無動揺の身口意の業がなされ積集される。彼の、この業に従った識は死に至るまで、結生識の原因として生起する。そして、この識が果を生起させるとき、内的・外的の渇愛がともに現前化する。それが死ぬと、前世から現世において、流転した個人存在を次第に生起させ、母の胎内において、胎内に宿る名色が、カララなど後続する特殊な状態にある間、老衰に至るまでの間、因となる識という縁をもった相続した果の識を生起させる。同時に、その識は再生する束縛であるから、その生成を引起す業は、それによって与えられた果を異熟として生じる。その異熟識は、まさにその名色を依処として生じる。

これを受けて、SNS「心意識相品」では、輪廻の主体としてのアーラヤ識（アーダーナ識）縁起を説き、『摂大乗論』（MS）では、縁起にアーラヤ識縁起と十二支縁起の二種があるとして、十二支縁起とアーラヤ識縁起が統合されている[(11)]。

blo gros yangs pa ’gro ba drug gi ’khor ba ’di na sems can gang dang gang dag sems can gyi ris gang dang gang du ’ang sgo nga nas skye ba’i skye gnas sam | yang na mngal nas skye ba ’am | yang na drod gzher las skye ba ’am | yang na rdsus te skye ba’i skye gnas su lus mngon par ’grub cing ’byung bar ’gyur ba der dang por ’di ltar len pa rnam pa gnyis po rten dang bcas pa’i dbang po gzugs can len pa dang | mtshan ma dang ming dang rnam par rtog pa la tha snyad ’dogs pa’i spros pa’i bag chags len pa la rten nas|sa bon thams cad pa’i sems rnam par smin eing ’jug la rgyas zhing ’phel ba dang yangs par ’gyur ro ||（中略）blo gros yangs pa rnam par zhes pa de ni len pa’i phyir ro || kun gzhi rnams par zhes pa zhes kyang bya ste | ’di ltar des lus ’di bzung zhing blangs pa’i phyir ro（SNS. 55. 4–23）

広慧よ、この六趣が輪廻するときに、それぞれの有情は有情趣として、または卵生、または胎生、または湿生、または化生として、身体を受けて生じ、最初に二種の執受、すなわち所依処を持った色根を執受すること、相、名、分別において言説の戯論の習気を執受することによって、一切種子心が成熟し、成長し、増大し、広大となる。（中略）広慧よ、この識をアーダーナ識と呼ぶ。何となれば、これによって、身体が保持され、維持されるからである。また、アーラヤ識ともいう。何となれば、それは安危同一の意味をもってこ

の身体のなかにあって、潜在するからである。

これに対し、MSA や MAV では、そうしたアビダルマ的な十二支縁起とは異質な縁起も説かれている。

pratītyabhāvaprabhave kathaṃ janaḥ samakṣavṛttiḥśrayate 'nyakāritaṃ |
tamaḥprakāraḥ katamo 'nyam īdṛśo yato 'vipaśyan sad asan nirīkṣate ‖ MSA_VI-4 ‖
縁起して生起したものに対し、現見を持った人々は、何故、（それとは）別に作られたものに執着するのか。（彼らは）有を見ず、無を見るから、この是の如き迷妄の種は如何なるものか。

これに対する註釈は以下の通りである。

tadā ca loko bhāvānāṃ pratītyasamutpādaṃ pratyakṣaṃ paśyati taṃ taṃ pratyayaṃ pratītya te te bhāvā bhavantīti | tat katham etāṃ dṛṣtiṃ śrayate 'nyakāritaṃ darśanādikaṃ na pratītyasamutpannam iti | katamo 'yam īdṛśas tamaḥ prakāro lokasya yad vidyamānaṃ pratītyasamutpādam avipaśyann avidyamānam ātmānaṃ nirīkṣate | śakyaṃ hi nāma tamasā vidyamānam adraṣṭuṃ syān na tv avidyamānaṃ draṣṭum iti（MSABh. 23. 14-17）
その時、世人は諸法の縁起を直接見て、それぞれの縁に拠ってそれぞれの諸法があると（見る）。彼は、何故この見を他によって作られた見等であり、縁起ではないと執着するのか。存在している縁起を見ずに、存在していない我を見るという、世人のこの種の迷妄は如何なるものか。実に、迷妄によって、存在しているものを見ないことが可能であるが、存在していないものを見ることはないからである。

ここに説かれているのは、縁起して生起したものには自性がなく、空であるにもかかわらず、世人はそれを我として執着するということである。これは十二支縁起というよりも、龍樹系の縁起に近いと判断できる。pratītyabhāva という語は、龍樹文献群においても見られる語である（注 6 参照）。MAV でも、虚妄分別を縁として生じる流転縁起を説く[12]一方で、同様な縁起が説かれている。

pratītyasamtpādārthaḥ |
punar hetuphalāyāsā'nāropā 'napavādataḥ ‖ MAV_III-18 cd ‖
縁起の意味とは、因と果と作用が、（無なるものを有と）増益することがなく、（有なるものを無と）損減することがないことである。

世親釈はこの偈を十二支縁起と結び付けて解釈しているが[13]、同論書では、三性説についても、同様に増益と損減が生じないことが根本真実であると定義していることから、縁起についてもその意味であったと考えられる。そして、三種の自性を有と無の観点から、常に無である、有ではあっても真実ではないもの、真実としてあって同時に非存在であるものと定義している。ここで、円成実性が真実としてあると同時に非存在であるというのは、三性説が空性思想と結びついていることを意味し、勝義に実在する vastu を説く BBh 等の三性説とは異なるものになっていることが分かる。

3-2. 瑜伽行派文献における依他起性

最古の三性説を説くとされる BBh「真実義品」では、三性という名称は見られないものの、言語表現される事物と、それに対する言語表現（仮説）、言語表現を離れた事物そのものの三者の間で、実質的な三性説が説かれている。注目されるのは、言語表現の対象である事物の先行性とその勝義的実在性である。

> katham ca punaḥ su-gṛhītā śūnyatā bhavati | yataś ca yad yatra na bhavati | tat tena śūnyam iti samanupaśyati | yat punar artāvaśiṣṭam bhavati | tat sad ihāstīti yathābhūtaṃ prajānāti | iyam ucyate śūnyatā 'vakrāntir yathā-bhūtā aviparītā | tad-yathā rūpādisaṃjñake yathā-nirdiṣṭe vastuni rūpam ity evam-ādi-prajñapti-vād'ātmako dharmo nāsti | atas tad rūpādi-saṃjñakaṃ vastu prajñapti-vād'ātmanā śūnyaṃ | kiṃ punaḥ tatra rūp'ādi-saṃjñake vastuny avaśiṣṭaṃ | yad uta tad eva rūpam ity evam-ādi-prajñapti-vād'āśrayaḥ | tac cobhayaṃ yathābhūtaṃ prajānāti yad uta vastu-mātraṃ ca vidyamāhaṃ vastu-mātrre ca prajñapti-mātraṃ na cāsadbhūtaṃ samāropayati | na bhūtam apavadate nādhikaṃ karoti na nyūnīkaroti notkṣipati na prakṣipati | yathā-bhūtaṃ ca tathatāṃ nir-abhilāpya-svabhāvatāṃ yathābhūtaṃ prajānāti | iyam ucyate su-gṛhītāśūnyatā samyak-prajñayā su-pratividdheti |(BBh. 47. 16-48. 6)
>
> さらにまた、「正しく理解された空性」とはどのようなものか。そこ（A）にそれ（B）が存在しない時、それ（A）はそれ（B）に対して空であると正しく観察することである。さらにまた、余れるものがあるなら、それが存在すると如実に知ること、これが不顛倒で如実なる空性に入ることである。それは例えば、色等と名づけられる事物には、色である等という仮説の言説を本質とした法は存在しない。そのため、色等と名づけられる事物は、仮説という言語を本質とすることについて空である。また、その色等と名づけられる事物において、余れるものは何か。それは、色といわれるところの仮説の言語の拠り所である。そして、その二つ、事物のみが存在していること、事物のみであることにおいて仮説のみがあることを如実に知る。存在しないものを増益せず、存在するものを損減せず、増せず、

減せず、取せず、捨せず、如実であり不可言説の自性である真実を如実に知る。これが正しい智慧によって正しく了達された「正しく理解された空性」といわれる。

これを受けて、SNS では、同様に勝義に実在する vastu と、それを所依として（存在しない）自性や言説が仮説されることが説かれ、「摂決択分中菩薩地」における五事説では、「因相」を言語表現のための語の基体、拠り所となった事物であるとしている[14]。それに対応するように、SNS と YBh における依他起性は、単に十二支縁起説とのみ定義されていて、未だに唯識説とは結びついていない。

chos rnams kyi gzhan gyi dbang gyi mtshan nyid gang zhe na | chos rnams kyi rten cing 'brel bar 'byung ba nyid de | 'di lta ste 'di yod pas 'di 'byung la | 'di skyes pa'i phyir 'di skye ba 'di lta ste | ma rig pa'i rkyen gyis 'du byed rnams zhes bya ban as | de ltar nasdug bsngal gyi phung po chen po 'di 'ba' zhig po 'di 'byung bar 'gyur ro zhes bya ba'i bar gang yin pa'o (SNS. 60. 25-30)

諸法の依他起相とは何か。諸法の縁起性である。つまり「これある故に彼あり、これ生じる故に彼生ず」、「無明の縁に依って行あり、その場合に苦蘊が生じる」というものである[15]。

これに対し、縁起説について十二支縁起だけに留まらず、龍樹系の縁起説をも含む MAV や MSA においては、依他起性と円成実性に空性が含まれる形になり、その意味で初期の実在論的三性説から唯識三性説へと構造的変化を遂げている。

abhāvabhāvatā yā ca bhāvābhāvasamānatā |
aśāntaśāntā 'kalpā ca pariniṣpannalakṣaṇaṃ ‖ MSA_XI-41 ‖

無と有であること、有と無とが等しいこと、不寂静と寂静、そして無分別とが円成実相である。

この偈に対する世親釈は、一切法が遍計所執性として無であること、そして、その遍計所執性の無が有であると説いており[16]、以下の MAV において、依他起性中に空性が含められるのに対応している。

abhūtaparikalpo 'sti dvayan tatra na vidyate |
śūnyatā vidyate tv atra tsyām api sa vidyate ‖ MAV_I-1 ‖

虚妄分別は存在する。そこに二つのものは存在しない。しかし、そこに空性は存在し、そ

の（空性の）中にまた、かれ（虚妄分別）は存在する

また、MAV、MSA においては入無相方便が確立され、円成実性は所取と能取の無であると説かれ[17]、外界に一切の事物を認めない唯識説と三性説が結びついた形になっていることが分かる。

saṃbhatya saṃbhāram anantapāṛām jñānasya puṇyasya ca bodhisatvaḥ |
dharmeṣu cintāsuviniścitatvāj jalpānvayām arthagatiṃ para iti ‖ MSA_VI-6 ‖
菩薩は智慧と福徳の無辺の究極の資糧を積み、法に対して思いがよく決択することから、対象の姿形は意言に随順すると了解する。

arthān sa vijñāya ca jalpamātrānsaṃtiṣṭate tannibhacittamātre |
pratyakṣatām eti ca dharmadhātus tasmād viyukti dvayalakṣaṇena ‖ MSA_VI-7 ‖
彼は対象が意言に過ぎないことを認識し、それに似て顕現する唯心に住する。そして、法界が現前する。それ故、二相を離れる。

nāstīti cittāt param etya buddhyā cittasya nāstitvam upaiti tasmāt |
dvayasya nāstitvam upetya dhīmān saṃtiṣṭhate 'tadgatidharmadhātau ‖ MSA_VI-8 ‖
覚知によって、心を超えたものは存在しないことを了解し、それ故、心も存在しないことを了得する。二が存在しないことを了解して、智者はそのような姿形のない法界に住する。

このように見ると、三性説が実在論から唯識論と結びついていくのと、縁起説が伝統的な十二支縁起説から龍樹系の説を含むようになるのは対応関係にあることが分かる。

4. 龍樹文献群に見られる縁起説について

4-1. MK における縁起説

最後に、龍樹文献群に見られる縁起説を見て、LAS 所説の縁起と比較する。MK では、よく知られているように、八不の縁起が説かれ、縁起が空・無自性を意味し、もし諸法が自性を持つならば、あらゆる因果関係が成り立たないことが示される。これは、同じく諸法の不生、空・無自性を説き、縁によって生じたものは存在しないという SAG の縁起説に近い。その一方、龍樹が「相依性」「相互依存」の縁起を説いていたことを窺わせる偈も MK には存在する[18]。

athāsad api tat tebhyaḥ pratyayebhyaḥ pravartate |
apratyayebhyo 'pi kasmāt phalaṃ nābhipravartate ‖ MK_I-14 ‖
しかし、それ（結果）は存在していないが、それら諸縁から（結果が）生じる。（それならば）どうして、結果は非縁からも生じないのだろうか。

phalaṃ ca pratyayamayaṃ pratyayāś cāsvayaṃmayāḥ |
phalam asvamayebhyo yat tat pratyayamayaṃ katham ‖ MK_I-15 ‖
結果は縁によって成立したものであるが、諸縁は、自身から成立したものではない。結果が自身から成立したものではない（縁）から生じている（ならば）、どうして、それ（結果）は縁から成り立っているのか。

tasmān na pratyayamayaṃ nāpratyayamayaṃ phalam |
saṃvidyate phalābhāvāt pratyayāpratyayāḥ kutaḥ ‖ MK_I-16 ‖
それゆえ、結果は縁から成立したものではなく、非縁から成立したものでもない。結果が存在しないのであるから、縁と非縁はどうして存在するのであろうか。

yadīndhanam apekṣyāgnir apekṣyāgniṃ yadīndhanam |
katarat pūrvaniṣpannaṃ yadapekṣyāgnir indhanam ‖ MK_X-8 ‖
もし、薪に依存して火があり、火に依存して薪があるならば、どちらが先に成立して、それに依存した火があり、薪があるのか。

yadīndhanam apekṣyāgnir agneḥ siddhasya sādhanam |
evaṃ satīndhanaṃ cāpi bhaviṣyati niragnikam ‖ MK_X-9 ‖
もし、薪に依存して火があるならば、すでに成立している火が（さらに）成立することになる。そうであるならば、火にならない薪もまた存在することになろう。

yo'pekṣya sidhyate bhāvas tam evāpekṣya sidhyati |
yadi yo'pekṣitavyaḥ sa sidhyatāṃ kamapekṣya kaḥ ‖ MK_X-10 ‖
それ（A）に依存して（別の）もの（B）が成立しているが、それ（B）に依存して（Aが）成立している。もし、依存されるべきものが先に成立しているならば、どちらがどちらに依存して成立しているのだろうか。

yo'pekṣya sidhyate bhāvaḥ so'siddho'pekṣate katham |
athāpy apekṣate siddhas tv apekṣāsya na yujyate ‖ MK_X-11 ‖

何らかのものに依存して存在は成立するが、まだ成立していない存在は、いかにして依存するのだろうか。

apekṣyendhanam agnir na nānapekṣyāgnir indhanam |
apekṣyendhanam agniṃ na nānapekṣyāgnim indhanam ‖ MK_X-12 ‖
薪に依存して火はあるのではなく、薪に依存しないであるのではない。薪は、火に依存してあるのではなく、火に依存しないであるのではない。

4-2. 他の龍樹文献群における縁起説

他の龍樹文献群においては、MK における不生不滅の縁起を継承しつつ、そこで萌芽的に説かれていた相互依存の縁起説が、より積極的に説かれている。本稿 2-3. で触れたとおり、LAS 本文中に説かれる縁起説と共通する内容になっているのは明らかである。こうした縁起説は、瑜伽行派文献では見ることができない。

gcig med par ni mang po dang / mang po med par gcig mi ‘jug /
de phyir rten cing ‘brel ‘byung ba’i / dngos po mtshan ma med pa yin / Śs_7 /
一なくして多は、多なくして一は意味をなさない。それ故、諸々の存在は依存して生じているのであり、相のないものである。

ma rig ‘du byed med mi ‘byung / de med ‘du byed mi ‘byung zing /
phan tshun rgyu phyir de gnyis ni / rang bzin gyis ni ma grub yin / Śs_11 /
無明は行がなければ生起せず、それがなければ行は生起しないから、この両者は相互に根拠になる。それゆえ、自性としては成立していない。

asmin satīdaṃ bhavati dīrghe hrasvaṃ yathā sati /
asyotpādād udetīdaṃ dīpotpādād udetīdaṃ dīpotpādād yathā prabhā // RĀ_I-48 //
これがあるとき、かれがある。例えば、長があるとき短があるように。これが生じるとき、かれが生じる。たとえば、灯火が生じるとき、明るさが生じるように。

hrasve ’sati punar dīrghaṃ na bhavaty asvabhāvataḥ /
pradīpasyāpy anutpādāt prabhāyā apy asaṃbhavaḥ // RĀ_I-49 //
一方で、また、短がなければ、長は存在しない。自体を欠いているから。また、灯火が生じなければ、明るさもまた生じない。

pitra yady utpādya《ḥ》putro yadi tena caiva putreṇa /
utpādya《ḥ》《sa》yadi pitā vada tatrotpādayati kaḥ kaṃ // VV_49 //
もし、父によって子が生じさせられ、またその同じ子によって、その父が生じさせられるのなら、そのとき、いずれがいずれを生じさせるのか言え。

5. 結論

以上、瑜伽行派と龍樹文献群所説の縁起説を見てきたが、LAS の縁起説が瑜伽行派よりも龍樹系の縁起に一致することは明白であろう。Lindtner［1992］が指摘するように、龍樹文献群と LAS との間には、CS 以外にも共通する偈頌が存在することから、龍樹文献群と LAS は、同時代（4-5 世紀）に、共通する人物によって作成された可能性がある[19]。その時代に、龍樹思想の圏内で、瑜伽行派の実在論的三性説とは異質な説が説かれ、その龍樹系の三性説が瑜伽行派に影響を与え、三性説の構造的変化を促したのではないかと推察することができる。従来、三性説の起源については BBh「真実義品」を挙げるのが定説となっているが、CS に説かれる三性説との関係についてはそれ程には言及されてこなかったと思われる[20]。LAS の縁起説と依他起性の概念に注目することで、こうした龍樹系の三性説が瑜伽行派に影響を及ぼし、その結果、MSA や MAV における唯識三性説を成立させたといえるのではないだろうか。

〔テキスト　略号〕

BBh : *Bodhisattvabhūmi*	Wogihawa Unrai（ed.）Bodhisattvabhūmi : A Statement of Whole Course of the Bodhisattva, Tokyo, 1930
CS : *Catuḥstavaḥ*	津田［2006］
LAS : *Laṅkāvatārasūtra*	Nanjo Bunyiu（ed.）*Laṅkāvatārasūtra*. Kyoto, Otani Univ. pr. 1923
MAV : *Madhyāntavibhāga*	Nagao Gadjin（ed.）*Madhyāntavibhāga-Bhāṣya* : A Buddhist Philosophical Treatise edited for the First Time from a Sanskrit Manuscript, Suzuki Research Foundation, 1964
MAVBh	See MAV
MK : *Mūlamadhyamakakārikā*	叶少勇『中論頌―梵蔵漢合校・導読・訳注』中西書局，2011
MS : *Mahāyānasaṃgraha*	P. No. 5549 D. No. 4048, 長尾［1982］
MSA : *Mahayānasūtrālaṃkāra*	Levi, Sylvain ed., *Mahayānasūtrālaṃkāra-Expose de la Doctrine du Grand Vehicle selon le Systeme Yogācāra-*. Tome 1 ; Texte, Paris, 1907
MSABh	See MSA
RĀ : *Ratnāvalī*	Michael Hahn（ed.）*Nagārjuna's Ratnāvalī*, Vol. 1 TheBasic Texts（Sanskrit, Tibetan, Chinese）, Bonn, 1982
YṢ : *Yuktiṣaṣṭikākārikā*	李学竹・叶少勇『六十如理頌 ――梵蔵漢合校・導読・訳注』中西書局，2014. P. No. 5225, 5265
ŚS : *Śūnyatā-saptati*	P. No. 5227, 5231, 5268, Lindtner［1982］
SNS : *Saṃdhinirmocanasūtra*	P. No. 774, D. No. 106, Lamotte［1935］
YBh : *Yogācārabhūmi*	Bhattacharya V.（ed.）*The Yogacārabhūmi of Ācārya Asaṅga*, Part 1.

	Univ. of Calcutta, 1957
ViSg : *Viniścayasaṃgrahaṇī*	D. No. 4038, P. No. 5539, 高橋晃一［2005］
VP : *Vaidalyaprakarṇa*	Yuichi Kajiyama（ed.）, *The Vaidalyaprakarṇa of Nagārjuna*, Miscellanea Indologica Kiotiensia No. 6-7
VV : *Vigrahavyāvartanī*	E. H. Johnston & Arnold Kunst（ed.）, *The Dialectical Method of Nagārjuna Vigrahavyāvartanī*, Translated from the Original sanskrit with Introduction and Notes, 1986.
	Yonezawa Yoshiyasu, *Vigrahavyāvartanī*, Sanskrit Translitaration and Tibetan Translation『成田山仏教研究所紀要』32, 2008

〔参考文献〕

池田道浩［1996a］「三性説の構造的変化（1）」『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』29

――――［1996b］「依他起性は実在するか」『駒澤大学仏教学部論集』27

石橋丈史［2014］「『楞伽経』の成立時期について：三性説という視点から」『印仏研』62

桂紹隆・五島清隆［2016］『龍樹「根本中頌」を読む』春秋社

五島清隆［2008］「龍樹の縁起説（1）―― とくに相互依存の観点から ――」『南都仏教』92

――――［2009］「龍樹の縁起説（2）―― とくに十二支縁起との関連から ――」『南都仏教』93

――――［2011a］「龍樹の縁起説（3）――『中論頌』第 26 章「十二支の考察について（1）――」『佛教大学仏教学部論集』95

――――［2011b］「龍樹の縁起説（3）――『中論頌』第 26 章「十二支の考察について（2）――」『佛教大学仏教学会紀要』16

――――［2012］「ナーガールジュナ作『十二門論』とその周辺」『シリーズ大乗仏教 6 空と中観』春秋社

三枝充悳［2000］『縁起の思想』春秋社

勝呂信静［1982］「唯識説における縁起の思想」『大崎学報』135（『勝呂信静選集一　唯識思想の形成と展開』山喜房仏書林 2009 所収）

高崎直道［2010］「楞伽経の祖型」『高崎直道著作集』第六巻　春秋社

高橋晃一［2005］『『菩薩地』「真実義品」から「摂決択分中菩薩地」への思想展開 ―― vastu 概念を中心として ――』山喜房仏書林

津田明雅［2006］『Catuḥstava とナーガールジュナ：諸著作の真偽性』京都大学文学研究科

長尾雅人［1982］『摂大乗論　和訳と註解』上・下　講談社インド古典叢書

中村　元［1980］『人類の知的遺産　ナーガールジュナ』（『龍樹』講談社学術文庫　2002）

原田和宗［2004］「『瑜伽師地論』「有尋有伺等三地」の縁起説（1）：テキストと和訳」『九州龍谷短期大学紀要』50

兵藤一夫［1990］「三性説における唯識無境の意義（1）」『大谷学報』69-4（兵藤［2010］所収）

――――［1991］「三性説における唯識無境の意義（2）」『大谷学報』70-4（兵藤［2010］所収）

――――［2010］『初期唯識思想の研究 ―― 唯識無境と三性説 ――』文栄堂書店

Lamotte Étienne［1935］*Saṃdhinirmocanasūtra, L'Exiplication des Mystères, Texte Tibétain,* Louvain

Lindtner Christian［1982］*Nagarjuniana : Studies in the Writings and Philosophy of Nagārjuna.* Institute for Indisk Filologi

――――［1992］*Laṅkāvatārasūtra in Early Madhyamaka Literature*

Takasaki Jikido［1980］Analysis of the Laṅkāvatāra ; in search of its Original Form, *Indianisme et Bouddhisme, Melanges offerts à Mgr Étiennne Lamotte*（和訳は高崎［2010］）

〔注〕

（1）「龍樹文献群」という呼称については、五島［2012］を参照。五島は、龍樹の真作は『中論』のみという立場を取り、空観・縁起観・仏陀観という点から各文献を比較精査し、全てを龍樹一人に帰すことはできないという結論に達している。本稿では、『中論』（MK）、『六十頌如理論』（YṢ）、『廻諍論』（VV）、『空七十論』（ŚS）、『宝行王正論』（RĀ）、『ヴァイダリヤ論』（VP）を参照した。

（2）LAS の成立に関しては、「偈頌品」（SAG）が経典本体に先立って成立したのではないかという仮説が提起されているが（Takasaki［1980］、石橋［2014］）、本稿でもその立場に立つ。

（3）池田［1996a］［1996b］、兵藤［1990］［1991］によれば、唯識説と結びつく以前の「実在論的三性説」と外界非存在を説く唯識説導入後の「唯識的三性説」とでは、依他起性の内容が質的に異なり、三性説は構造的変化を遂げている。本稿でも、この意味で「構造的変化」という語を用いる。

（4）依他起性と縁起が同じ意味であろうと理解する根拠に、YBh において、縁起の意味が説かれる箇所で「依他」（paratantra）という語が用いられている点を挙げることができる。pratītyasamutpādārthaḥ katamaḥ | niḥsattvārthaḥ | sattvanityattve itvarapratyupasthāpanārthaḥ | satītvarapratyupasthāne paratantrārthaḥ | sati paratantre nirihārthaḥ（YBh. 203. 1）縁起の意味は何か。個人主体がないという意味である。個人主体がないゆえ、無常という意味であり、無常ゆえに暫住という意味であり、暫住であるゆえ、依他という意味であり、依他であるゆえ、作用がないという意味である。

（5）石橋［2014］参照。

（6）SAG では、依他起性（paratantra-svabhāva）を「縁より生じた自性」pratyayodbhava- svabhāva（tib. rkyen las skyes pai rang bzin）と言い換えている箇所がある。これは、YṢ における pratītya-utpāda、VV における pratītya-bhāva という表現に近いようにも思われる。両者ともに、縁起を意味する語として用いられている。SAG の依他起性は、こうした龍樹文献群所説の縁起の概念の延長にあるように考えられる。

yena kalpena kalpenti svabhāvaḥ pratyayodbhavaḥ /
bāhyārthadarśanaṃ mithyā nāsty arthaṃ cittam eva tu // SAG. 153//
縁より生じた自性は、分別によって分別する。外界に対象を見ることは虚妄であり、対象は存在しないが、心こそは（存在する）。

（7）遍計所執性が因相と名との結合より生じるという SAG. 307 偈と同じ内容が SNS においても見られる。yon tan 'byung gnas de la mtshan ma dang 'brel ba'i ming la brten nas ni kun brtags pa'i mtshan nyid rab tu shes so（SNS. 63. 11-12）徳本菩薩よ、このうち因相と結びついた名に基いてこそ遍計所執性を理解する。

（8）本稿 4-2 を参照のこと。

（9）trividhatrividhābhāso grāhyagrāhakalakṣaṇaḥ /
ābhūtaparikalpo hi paratantrasya lakṣaṇaṃ//MSA. XI-40 //
三種と三種の顕現を有し、所取・能取の相を有する虚妄分別が依他起相である。
kalpitaḥ paratantraś ca pariniṣpanna eva ca/
arthād abhūtakalpāc ca dvayābhāvāc ca deśitaḥ//MAV. I-5//
遍計所執、依他起、円成実が示されたのは、（順に）対象であるから、虚妄分別であるから、二が無いからである。

（10）蔵訳（gzhan gyi dbang gi rang bzhin la kun brdags ba'i rang bzhin rnam bar rtog ba'i sems sna tsogs rnam pa）を参照した。

（11）Ms. I-19

（12）MAV. I-9, 10

（13）tatra hetusamāropaḥsamskārādīnāṃ viṣamahetukalpanāt | hetvapavādo nirhetukatvakalpanāt | phalasamāropaḥ sātmakānāṃsaṃskārādīnām avidyādipratyayapravṛttikalpanāt（MAVBh. 45. 22-46. 2）その中で、因についての増益とは、行などに対して不正な因を考えるからである。因についての

損減は、因が無いと考えるからである。果についての増益とは、行などが、無明を縁として実体を伴って生じると考えることによる。

(14) brjod pa ni dngos po med pa can yang ma yin te / dngos po de'ang gang zhe na / 'phags pa rnams kyi 'phags pa'i shes pa dang / 'phags pa'i mthong bas brjod du med par mngon par rdzogs par sangs rgyas pa gang yin pa ste / brjod du med pa'i chos nyid de nyid mngon par rdzogs par rtogs par bya ba'i phyir 'dus byas shes ming du btags so（SNS. 39. 19–24）
言語表現は事物を有しないのではない。この事物とは何であるか。聖者たちが聖智と聖見によって不可言説として等覚するもので、その不可言説の法性を等覚させるために事物を有為という名で仮説するのである。
rgyu mtshan gang zhe na / mdor bsdu na / mngon par brjod pa'i thig gi gzhi'i gnas su gyur pa'i dngos po gang yin pa'o（Visg 1. 2. 1）因相とは言語表現のための語の基体、依り所となった事物（＝*vastu）である。

(15)「摂決択分」においても同様に定義されている。gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid gang zhe na / 'di lta ste / rnam par dag par bya ba'i ngo bo nyid gang yin pa'o //（ViSg. 2. 2. 2）依他起性は何かといえば、諸法の縁起性である。

(16) pariniṣpannalakṣaṇaṃ punar tathatā sā hy abhāvatā ca sarvadharmāṇāṃ parikalpitānābhāvatā ca tadabhāvatvena bhāvāt（MSABh. 65. 8）また、円成実相は真如である。それは、一切法が遍計所執としては無であることと、無ではないことである。その無としては有であるからである。

(17) upalabdhiṃ samāśritya nopalabdhiḥ prajāyate /
nopalabdhiṃ samāśritya nopalabdhiḥ prajāyate // MAV. I–6 //
了得にもとづいて、無了得が生じる。無了得にもとづいて無了得が生じる。世親釈によれば、唯識の了得にもとづいて、対象の無了得が生じ、対象の無了得にもとづいて唯識の無了得もまた生じる。そうして所取と能取の無相に悟入するのである。

(18) 中村［1980］、三枝［2000］等により、これまで龍樹が相依性の縁起を説いていたと理解されてきたが、その文献学的根拠は月称の註釈であり、後代の文献に基くものであると疑問も投げかけられている（五島［2008］［2016］）。五島は、MK における相互依存に言及する偈は、諸法の無自性・空を説くための理由に過ぎず、MK はそれを説くのが目的ではないと見ている。すなわち、薪と火に関する偈の場合、両者は相互に依存するのではなく、依存しないのでもないというのが結論であり、それぞれに実体はなく、無自性・空であるために、実体同士の関係が成立しないことを述べているにすぎない。MK の段階では、相互に依存している二者は、一方が成立しなければ、他方は成立しないことを述べているにすぎず、縁起の意味は、あくまでも諸法の無自性・空であるということになる。

(19) 桂・五島［2016］の中で、五島は龍樹文献群の成立時期を 4 世紀頃と推定すれば、LAS をはじめとする大乗経典の思想を反映していることや、唯識や三性説を予想させる文言がみられることも不思議ではないとしている（p. 322）。

(20) 津田［2006］において、CS. III（Acintya-stavaḥ）に説かれる三性説が瑜伽行派文献に説かれる説と比較検討されている。その中で、津田は CS. III の三性説は、二諦説の観点から説かれており、三性説が成立する前の段階と判断し、CS を龍樹文献とみなしている。

（いしばし　たけし　文学研究科仏教学専攻博士後期課程満期退学）
（指導教員：松田　和信　教授）
2018 年 9 月 28 日受理